

国立民族学博物館の収蔵品⑤1

天然痘の痕



写真1 朝鮮半島の巫俗で使われる媽媽神の肖像。流行が移動していく様子を子供たちが不安そうに見つめる様子だと伝えられる。標本番号：H0214662



写真2 岐阜県の玩具「赤布猿」。1977年に収蔵されたもの。標本番号：H0011967

天然痘（痘瘡）は、先史時代から人類を苦しめてきた感染症である。感染力が強く、致死率も高い。二十世紀だけでも、世界で数億人が命を奪われたとされる。そのうえ、たとえ治ったとしても、顔面を含む皮膚に痘痕（あばた）を残す。

興味深いのは、ウイルスとか、免疫などという概念がない時代環境で、人びとが天然痘を理解しようとした方法だ。たとえば、天然痘を流行らせるとともに、治してもらう若い女神がアジア各地にみられる。インドの「シタラ」、中国地域の「痘疹娘娘（ドウジエンニヤンニャン）」、朝鮮半島の「媽媽神（ママシン）」（写真1）などだ。

さて、日本にはそうした女神がいただろうか。天然痘は日本列島にも六世紀ごろ伝わり、人びとを苦しめてきた。奈良の大仏が建立された背景のひとつも、天然痘の大流行だったといわれる。ただ、日本の天然痘に関する民間信仰は、むしろ多種多様だ。多くに共通するのは、天然痘が赤い色や身近な動物を恐れると信じられる傾向で、会津地方の「赤べこ」、飛騨地方の「猿ぼぼ」（写真2）などが、その代表例である。

一九八〇年、世界保健機関は天然痘の根絶を宣言した。ごく少数の研究所に保存されている分を除き、地球上から天然痘ウイルスは撲滅されたとされる。今のところ、これは人間の感染症を撲滅できた唯一の快挙だ。しかし日本では郷土土産でしかなかったり、韓国の媽媽神も意味不明なものひとつとなりつつある。いわば遺産となったのだ。

だが、日本で五十代以上の人びとの腕に予防のための種痘接種の痕がまだ残っているように、人類の文化にも天然痘の痕がある。朝鮮半島の巫俗では、天然痘が根絶されたからといって、媽媽神の肖像がお役目御免となることはない。昨年でも、筆者が知るある母親は、「ちょっとした病気」で入院している息子の快癒を願って巫者を訪ね、媽媽神を崇める儀礼を行ってもらっていた。彼女はこのことを、医療で最善を尽くす親の義務に「プラス・アルファ」する母の愛だと説明した。医療現場に任せるだけでなく、自分の力でも何かしたいのだという。こうなると単なる遺産でなく、健やかに子供を育てたいという人類普遍の希望が、媽媽神に託されているように思える。

彼女の息子は、すぐに退院した。彼女は病院の関係者に深く感謝していたが、媽媽神が何かしてくれたとは特に思っていない。ただ、圧倒的な力をもつ現代医療のなせる業を前に、母の愛など無力だなどと、彼女は信じたくなかったようだ。それを信じるくらいならば、媽媽神を信じてでも自分で何かをした方が、彼女にはマシだったのだ。

人類の医学や薬学や保健学や生物学を進歩させてきたものは何だろうか。それもやはり、現場の医療に自分の力で「プラス・アルファ」しようという絶え間ないモチベーションでないだろうか。媽媽神は生き続ける、そんな生命科学のモチベーションと同様に。（太田心平）